柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：044-988-0004（柿生中学校）
http://www.kakio-kyodo.com
第59号

新しい年度を迎えるにあたって

郷土の未来は祖先の足跡（そくせき）と郷土の文化を知ることから

ふるさと再発見　そして未来へ！

「温故知新（おんこちしん＝古きをたずね新しきを知る）という言葉があります。私たち現代人は過去や祖先の思いを知らぬままひたすら未来に向かって突き進もうとしています。

「そんな考えは古いよ」「もう時代が変わった」などの言葉がよく使われますが、はたして本当にそうなのでしょうか。

「不易（ふえき）」と「流行」という言葉があります。物事には比較的早く忘れ去られてしまう「流行」と、変わらない価値を保ち続ける「不易」があります。

郷土の祖先が何百年もの間、継承し築きあげてきた知恵や伝統文化の中には時代を超越した何らかの価値があるに違いありません。私たちが未来を考えるとき、まずは足元の郷土文化をもう一度振り返り、祖先の築きあげてきた土台の上に立って未来を考えていく必要があるのではないかと思います。それは古きものを何でもかんでも継承したり復活させるということではありません。良きことは良きこととし、大切なことを後世につなげさらに発展させていくということなのです。

それならば郷土の文化をじっくり考え、良きものを発見していく作業が必要となってきます。遠い昔のご先祖様の時代からこの地にすんでいる方は、まずはご自分の先祖の築いてきた足跡を振り返ってみようではありませんか。祖先は何を大切にし、何を必要としていたのか。そして今、私たちが大切なことを失ってしまったものがあったとしたら、それはどんなことなのでしょうか。

最近この地に引っ越してこられた方は、縁あってこの地に居住し、新たな文化を築き上げていくための土台として、この地の文化を大いに知ろうではありませんか。その中にきっとこの地の思いと一体になれる「何か」を発見できるに違いありません。

この「柿生郷土史料館」「カルチャー・セミナー」「特別企画展」「柿生文化」などの一連の活動はその「先祖の思い」「何か」を知る手がかりになれればとの願いから進められています。

「オオカミの護符」の著者小倉美恵子さんは宮前区土橋にお生まれになりました。それはちょうど東京オリンピックが始まろうとしていた時代でした。そのころから日本は前近代的なものを切り捨て、本格的な近代化への道を超スピードでひた走るようになりました。著者の前書きに『山が削られ、親しい小径（こみち）や小川が消え、茅葺屋根の家々も消え失せて便利になるにつれ、どういうわけか「めんどくさい」を口癖に生活するようになった』とご自身を振り返っておられます。現代の子供たちの底に、ある重い何かが芽生え始めたのでしょうか。そして『日々なじんできた風景が失われてゆくのを横目に見ながら「何かが違う」と心の中で叫びをあげている自分がいた』と、さらに『何か大切なものを置き忘れてきたような気がする…』と綴っていらっしゃいます。私たち現代人の「忘れ物」とは一体何なのでしょうか・・・・・・それは現代人の我々がそれぞれの心の中で真剣に考え、突き止めていかなければならないことのような気がします。今日、学校現場で深刻な問題として問われている「いじめ」問題も根源的なものがその辺にあるのかもしれません。

早野のどんど焼

小倉さんはある思いを持ちながら「オオカミの護符」「うつし世の静寂に」の執筆・制作に取り組まれました。そしてその「思い」こそが東日本大震災で多くの人々の心に育まれた『絆』であり、現代人にとって重要なテーマであることを確信したと述べられていらっしゃいました。

老いも若きも、もともとの住民も新住民も共に手を取り合って郷土の未来を作り上げていこうではありませんか。それはやがて郷土の新しい文化となり伝統となっていくものと確信しております。　（文：板倉）

シリーズ　「麻生の歴史を探る」 第29話

稲毛三郎　～古民謡五反田節～

小島　一也（柿生郷土史料館相談役）

重成は悲劇の武将でした。従兄弟で妻が姉妹の畠山重忠を死に追いやったと讒訴され、ついには元久2年（1205）6月、鎌倉経師ヶ谷の館で子息小澤重政、弟の棒谷重朝と共に謀殺されてしまいます。すべては頼朝の死後幕府の実権を握ろうとした執権北条時政、牧の方の陰謀で、将軍頼家、実朝が殺され、重忠、重成は鎌倉政変の犠牲者でありました。

伝稲毛重成墓（廣福寺）

実力者重成を失った稲毛、小澤の郷はどうなったのでしょうか。承元2年（1220）現多摩区長尾の威光寺（妙楽寺）が悪党50余人に狼藉された記録があり（市史資料）、威光寺と云えば頼朝の弟全成を院主とする源氏代々の祈願所で、源家の衰退と当時の治安のほどがうかがえ、重成の存在が大きかったことを物語っています。

一方、後になって重成の死が父時政、義母牧の方の謀事だったことを知った北条政子は、京都の公家に嫁いだ重成の娘の子を養女とし重成の遺領小澤郷を与えています（市史資料）。政子にしてみれば父時政の所業を詫びての罪滅し、稲毛一族へ追善供養の意味もあったのでしょうが、時勢はすでに北条の世、稲毛・小澤郷は小山田郷を含め北条氏の下に組み込まれていきます。

今は聞かれなくなりましたが、川崎市北部には「これさま」と呼ぶ婚礼の祝唄があります。これさまとは「こちらさま」の敬語で、その家を褒め、嫁婿を褒め、ごちそうを褒めての五七八五調、ご詠歌風の悠調な節回しで、この古謡は重成が将軍頼朝の妻の妹を娶った時、鎌倉から来た付け人が「～鎌倉の御所のお庭で～十三小女郎が酌をする～・・・」と唄ったのがその始まりで、この古謡は菅の「初瀬」、細山・高石の「ホッリハッセ」と伝承され、郷土の文化財的民謡五反田節となっています。五反田とは旧橘樹郡菅生郷五段田村を云い、その歌詞は郷土を謡い込んでいることが特徴で、そのことは前記武蔵風土記稿、菅生郷内作延域の「此辺婚姻の席に必謡のものあり・・・」を裏付けております。なおこの五反田村は明治8年（1857）上菅生村と合併、生田村が誕生します。生田の「生」は上菅生の生と五反田の田の合成だそうですが、今も五反田の地名は残り、この地を中心に「五反田節保存会」が結成されています。

この郷土の武将稲毛三郎重成が平成23年の春、市民劇「枡形城　落日の舞」と題して上演されています。作小川信夫、演出ふじたあさや。出演は市内公募の皆さんで、権力と陰謀、愛と嫉妬、非常と慈悲、領主と領民をテーマとして重成の人間模様を描いたドラマです。将軍の義妹を娶る重成、伝承者が唄う祝唄「これさま」。領民に被害が出ぬよう死を覚悟して城を出る重成父子。これを送る妻綾子の沈痛の舞。会場の市文化会館である多摩市民館は満員だったそうで、感動したのは私一人ではなかったようです。

初瀬保存会公演

畠山重忠が討死した鶴ヶ峰（横浜市旭区）には埼玉県河本村（出身地）と地元民によって公碑が建てられていますが、重成父子、弟重朝、稲毛一族が討死した鎌倉経師ヶ谷には、重成を偲ぶものは何一つありません。市民劇が上演され、これさま節が今に残るのがせめてもの慰みであります。重成は悲運の武士でした。

参考文献：「川崎の古民謡（角田益信）」「川崎市史」「新編武蔵風土記稿」「横浜旭区ガイド」

シリーズ
私の少年時代（2）

私の小学校時代

村田和男（柿生郷土史料館支援委員）

私は終戦１年前に横須賀で生まれ、戦後現在のところに。

当時下麻生は軒数が45軒位、そのうち約40軒が農業で畜産（乳牛、養豚）、養蚕、お茶、炭をやっている家もあった。今では貴重になった禅寺丸柿はどこの家にもあり、米と共に生活資金となっていた。勤め人、商人は数軒しかなかった。

道路は狭く、姉が昭和27年頃小学校の修学旅行に行くのにバスが入っても曲がるところがなくて、鉄町まで歩いて乗車したと聞いている。また、アメリカ軍の車が来ると田んぼの中に突っ込んでしまい、道路に戻すのに苦労しているのを見に行ったことが何回もあった。その後道路も整備され、バスが昭和31年に柿生－溝の口間、昭和38年に柿生－鉄町間が開通した。

私が小学校に入学した頃は、校舎は木造、通学にはゴム靴、上履きは藁草履を使用、冬の暖房には低学年時は炭、高学年時になってやっと石炭ストーブが使えるようになり、水道が引かれた4年生頃給食になった。アメリカからの脱脂粉乳、カンパンが思い出に残っている。

家の近くには田んぼが多く、田植え前にバケツを持ってタニシを取り、茹でて貝から身を取り出し、ゴボウと煮たものを食べた。堀川にはドジョウがいて、我が家では食べなかったが味噌汁に入れて食べた家も。また、煮干し、カエルの足、ザリガニの尾を餌にしてザリガニ捕りもできた。

夏休みの日記には毎日セミ捕り、真福寺川で米粒・うどん粉・ミミズなどを餌に使って池ブナ・川ブナがよく釣れたこと、仕掛けをすればナマズ・ウナギもかかったこと、小学校の校庭で毎朝ラジオ体操、お盆後には盆踊り、映画会があり売っていたキャンディ・ラムネのおいしかったこと、鶴見川の寺家堰下で遊んだこと、等々書いた記憶がある。現在の鶴見川は整備されて心配なくなったが、当時は台風のたびに氾濫し大洪水で大変だった。

外の遊びでは、鬼ごっこ・かくれんぼ・缶けり・メンコ・馬とび・くぎ通し・ドッジボール・相撲・野球などに加えて、冬にはカルタ・すごろく・おはじき・凧上げ・コマ回し・羽根つき等。

テレビを初めてみたのは小学校3～4年頃、川崎か渋谷の映画館通りの街頭でちらっと。高学年になって柿生でも何軒か備えてプロレスの中継が大人気になった。

しかしなんといっても一番の思い出は今も変わらない毎年1月28日の麻生不動のダルマ市。娯楽のなかった昔、誰にとっても最高の楽しみであったことは言うまでもない。

****

「橘樹郡衙」国の指定目指し保存・活用へ

2月23日の神奈川新聞によりますと奈良・平安時代の武蔵国橘樹郡の郡役所である「郡衙（ぐんが）」跡地（千年伊勢山台遺跡）を川崎市が土地の一部を取得し、保存・活用へと動き始めました。

郡衙周辺は隣接する影向寺とあわせて古代川崎の政治・行政・文化の中心として重要な役割を果たしていたと考えられます。周辺の遺跡とあわせて今後さらなる調査に期待が寄せられています。

日本書紀によると安閑天皇の元年（6世紀前半）の項目に『武蔵国造（こくぞう・くにのみやつこ＝大和政権の地方を治める仕組みで各地域の有力者が首長に任命された）が「橘花」などの4ヶ所の屯倉（みやけ＝朝廷の直轄地）を献上した』との記述があり、6世紀前半頃には「タチバナ」の地名は既に存在していたと考えられます。

千年伊勢山台遺跡全景

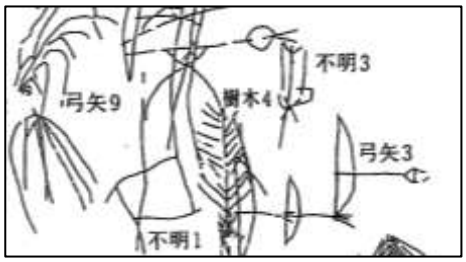
遺跡周辺の地図　●のところが橘樹郡衙跡地

遺跡周辺の影向寺・橘樹神社・宝界寺古墳・馬絹古墳などとの関係も興味あるところです。（文：板倉）

カルチャー・セミナー報告　第38回「柿生の横穴墓に描かれた線刻画を絵解きする」

2月23日（土）柿生郷土史料館特別展示室で日本考古学協会の村田文夫氏をお呼びして柿生に多数確認されている古墳時代の横穴墓に描かれている線刻画についてその意味を解明していただきました。

特に王禅寺白山横穴墓の線刻画については、古墳時代の人々の生活や信仰の姿について大変興味あるお話を頂きました。



右の線刻画を見ますといくつもの弓と矢の絵が見えます。矢はすべて横穴墓の入り口方向を向き、墓内に忍び寄ろうとする邪気を射落とそうとする意図が明確に表現されています。また矢の形は明らかにふくらみのある鏑矢（かぶらや）です。平家物語にも出てくるあの「ヒョー」という音を出す鏑矢が見事に描かれています。また左の絵を見ますと喪屋（もや＝古代、本葬まで遺体を納めておく小屋）と思われる家屋が描かれており、当時の葬送習俗の姿もわかってきます。

このように柿生周辺に存在する横穴墓は単なる古墳ではなく、今から千数百年も前の柿生に住んでいた人々の生活の様子が如実に分かる貴重な材料となるものです。また後日、村田先生には他の横穴墓線刻画に関する講演を頂きたいと考えています。

∈∈∈∈∈∈柿生郷土史料館開館日のご案内∋∋∋∋∋∋

◎開館日：偶数月は土曜日、奇数月は日曜日

4月　6・13・20・27日（毎土曜日）　5月　5・12・19・26日（毎日曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時

∈∈∈∈∈柿生郷土史料館4～5月の催物ご案内∋∋∋∋∋

第2回　実物のミニ歴史資料展　（３月・４月）　（入場無料）

「『蚕当計（養蚕用の温度計）』とシーボルト」

主な展示資料　『養蚕実験禄』『養蚕乾湿計』『YOU－SAN－FI－ROKU』

内容　幕末、養蚕業にとって画期的な発明が『蚕当計』でした。この発明のヒントがシーボルトの体温計でした。公開されるものは、温度計にさらに湿度計が装備された『養蚕乾湿計』で明治時代に使用されていたものです。加えて当時の養蚕の秘伝書である『養蚕秘録』とフランス語に翻訳された『YOU-SAN-FI-ROKU』（ようさんひろく）も展示します。ヨーロッパでは日本の高い技術を認め、これらの養蚕技術書の翻訳版が多数出版されました。

公開日　4月　6・13・20・26日（土曜日）

第3回　実物のミニ歴史資料展　（５月・６月）　（入場無料）

「活版印刷技術が世界史を変えた！」

主な展示資料　『フランス14世紀羊皮紙手書き時祷書』『15世紀活字印刷（インキュナブラ）の時祷書』『16世紀聖書』『イタリア1745年のグレゴリオ聖歌集』　他

内容　15世紀半ばドイツのグーテンベルクが発明した活版印刷機は人々の情報量を飛躍的に伸ばすことになりました。このことが15世紀の宗教改革、17世紀から始まった市民革命など世界の様子が一変するきっかけとなりました。今回は発明以前の羊皮紙による聖書、発明から約20年後に印刷（インキュナブラ）された聖書や1500～1600年代に作成されたヨーロッパの資料を展示いたします。

公開日　5月　5・12・19・26日（毎日曜日）　6月　8・15・22・29日（毎土曜日）

第40回　カルチャー・セミナー　（入場無料）

「1745年のグレゴリオ聖歌が復元された」

～中世ヨーロッパの面影を残す４線譜を復元、そして歌います～

・復元作業と講師：丸山美智子氏（二期会会員）
・日時：平成25年5月26日（日）午後1時30分～
・内容：復元した聖歌を実際にお聴きいただき、約300年前の聖書を直にご覧ください